

# 「死者のための代理洗礼」 (1コリ15:29) についての一考察

Investigation into “Vicarious baptism for the dead”  
(1 Corinthians 15:29)

村山 盛葦  
Moriyoshi Murayama

キーワード

代理洗礼、死者、霊、復活の体、魂、からだの共同態

Key words

vicarious baptism, the dead, spirit, resurrection body, soul, corporeal union

要旨

本論文では、キリスト信仰者に宿っている聖霊の働きがなければ、復活の体に与ることができないとパウロが考えていたことを明らかにする。この考えに基づくと、未受洗者、すなわち、生前に聖霊受容を体験できなかった死者は、復活の体に与ることができないことになる。それを危惧する、死者の知人もしくは遺族が、故人のために代理洗礼を行っていた可能性があると言えよう。換言すると、代理洗礼において授与された聖霊が未信者の故人に賦与されると信じていた可能性がある。また、代理洗礼の対象者（死者）について、アルベルト・シュヴァイツァーが主張するように、キリストとの「からだの共同態」が夫婦間の「共同態」（子を含む）に投影されることが代理洗礼の前提とするならば、その対象者は家族関係にあった故人（夫、妻、子、可能性としてその他の血縁者）に限られることになる。ただし、代理洗礼がコリント教会で十分に認知されていたことを踏まえると、すなわち、その実例が数多くあったとすると、教会に出入りしていた未受洗者もその対象者に入っていたと想定する余地がある。

## Summary

This paper makes it clear that Paul thought that without the presence of the Holy Spirit dwelling in them, believers could not be transformed into the body of resurrection. Based on this belief, the unbaptized, that is, the dead who did not receive the Spirit during life, cannot be transformed into the body of resurrection. It is understood that the acquaintances or bereaved families of the dead, who dreaded this, have performed vicarious baptisms for the dead. In other words, they believed that the Holy Spirit conferred by their vicarious baptism would be bestowed upon the unbaptized deceased. In addition, as Albert Schweitzer argues, the “corporeal union” with Christ is projected onto the “natural corporeal union” of the couple (including the child). If we took this idea as the premise of vicarious baptism, the issue of vicarious baptism would be limited to the deceased who had a family relationship (husband, wife, child, possibly other relatives). However, given that vicarious baptism was widely recognized in the Corinthian church, i.e., knowing that there were many instances of it, there is room for assuming that unbaptized people who attended the church were among the recipients of this practice.

## 1. 問題の所在

B. M. Foschini<sup>1</sup>、R. E. DeMaris<sup>2</sup>、J. A. Trumbower<sup>3</sup>、M. F. Hull<sup>4</sup>、D. B. Sharp<sup>5</sup>をはじめとする先行研究によって、古代ギリシア・ローマ世界において死者に対する生者側の働きかけ（葬り、祈り、献げ物、記念式、墓参、祭儀、密儀など）とその行為による死者への何らかの作用が信じられていたことは確認されてきた。この信仰は、現代においても共感し得る普遍的な人類の営みの一部と言えよう。コリント教会における死者のための代理洗礼もまた、このような営みのひとつとして位置づけることができるだろう。しかし、洗礼という行為が、キリスト教の入信儀礼であり、キリストとの合一を通して罪の贖いと新しい命が与えられる決定的な機会であるため（ロマ6:1-11; ガラ3:27-28）、コリント教会の代理洗礼は、種々の問題と疑問を研究者たちに投げかけてきた。

例えば、G. D. Fee は二つの問題点を挙げている<sup>6</sup>。一つは、死者のための代理洗礼は歴史的にあるいは聖書文献学的に前例が見当たらない。そのため、誰が、誰のために、なぜ、そしてどんな効果があると考えて行ったか、という本質的な問いに明確に答えることが出来ない。二つ目は、パウロが神学的に問題がある代理洗礼の事例を使ってどのように彼の主張を訴えているのかという問題である。つまり、代理洗礼

は、恵みによる信仰義認、そして恵みを与えられたことへの個人的な応答としての洗礼、という神学的理解に相容れない。また、代理洗礼は最も劣悪な秘儀信仰の様相を呈し、その秘儀がその場に居合わせない者に救済的効果があるという「魔術的」な香りがする、と Fee は否定的に受け止めている。

確かに、代理洗礼の前例は第1コリント書以前には見当たらないが、マルキオン派の人々がそれを行っていたことが確認されている (John Chrysostom, *Hom. in Epist. ad I Cor*, 40)<sup>7</sup>。また、死者のための祭儀は古くから存在し、死者の贖罪や復活あるいは再生が祈念された。たとえば、2マカ12:38-45は、偶像の罪を犯し戦死した者たちのために、武将ユダが彼らの復活を期待しながら贖罪の献げ物と祈りをささげたことを伝える。また、ギリシア世界では、オルフェウスの儀式が死者の再生(生まれ変わり)を希求し執り行われた<sup>8</sup>。さらに、代理洗礼が「魔術的」と判断することは、その内実を吟味する以前の偏見であり、また、「魔術」の定義は立場によって変わるため、不毛な議論となってしまう。例えば、非キリスト教世界では、イエスは「魔術師」と理解され(オリゲネス『ケルソス駁論』1.38, 68他)、「死者の復活」の信仰は嘲笑の対象であった(使17:32)。また、1世紀末頃キリスト教は「俗信(*superstitio*)」と見なされていた(プリニウス『書簡』10.96)。それゆえ、「魔術的」であるかを問うのではなく、代理洗礼とパウロの洗礼理解(神学理解)は相容れないものなのかどうかを吟味すべきである。パウロはコリントの信者に復活信仰の確かさを訴えるために代理洗礼の事実を指摘しているが、代理洗礼が異教的であるという見解は一切示していない<sup>9</sup>。テルトゥリアヌスも代理洗礼を少なくとも理論上は認めていると思われる(Tertullian, *De Resurrectione Carnis*, 48; *Adversus Marcionem* 5.10)<sup>10</sup>。

アルベルト・シュヴァイツァーは、死者のための洗礼は、終末論的世界観に基づいたメシア的栄光に与る待望と、「キリストにある」という実在的観念と、これら二つの前提からのみ理解し得ると論じる<sup>11</sup>。つまり、代理洗礼はパウロの洗礼理解と必ずしも相反しない。そして代理洗礼が意味をなすのは、洗礼を受ける生者と死者との間に、キリストのからだの内にあるという「からだの共同態(*corporeal union*)」という関係が存在する限りにおいてである。シュヴァイツァーは、洗礼がキリストと共に死にキリストと共に生きるという契機となり、その後受洗者は「キリストにある」という実態を生きて行くことを字義どおりに理解する。この理解を前提に、シュヴァイツァーは古代人にとっての、死者のための代理洗礼の意味を考察している。

さらに、シュヴァイツァーによれば、1コリ7:14は、「キリストにある」という信仰者の「からだの共同態」が、夫婦や親子の間にある「自然的肉体的共同態」へと投影されるとパウロが想定していることを論じている。キリストとの「からだの共同態」は死によっても終わらない。それゆえ、例えば、死んだ未信者の妻のために洗礼を受

ける夫は、彼女がそのことによって、彼と共に「キリストにある」者として、終末の時に復活に与ることが出来ると期待することができる<sup>12</sup>。このように、シュヴァイツァーは死者のための代理洗礼は、家族内においてのみ有効であることを主張する。つまり、代理洗礼の意味が成立するのは、「キリストにある」という「からだの共同態」(洗礼の実態)と家族内にある「自然的肉体的実態」に基づいているのである<sup>13</sup>。

本論文では、シュヴァイツァーが提示した、キリストのからだの内にあるという「からだの共同態」の概念を前提にしながら、洗礼時に受容した聖霊(キリストの霊)(*πνεῦμα*)が復活時に重要な働きをするとパウロが考えていたことを論じる。この考察を通して、死者のための代理洗礼において、死者への「聖霊の賦与」が想定されていた可能性を指摘する。聖霊の賦与については、シュヴァイツァーは代理洗礼との関係では論じていない。また、その他の先行研究においても、死者への具体的な作用を吟味したものは見当たらず、以下の論考ではその内実の一端を明らかにしたい。なお、代理洗礼の対象者(死者)の範囲についても最後に論じる。

## 2. 復活時における聖霊の役割

洗礼時に聖霊(キリストの霊)の授与があることはしばしば言及されている(1コリ6:11, 17; 10:2-4; 12:13; 2コリ1:21-22; ガラ3:2-5。参考、使1:5; 2:38; 19:2-6)<sup>14</sup>。また、洗礼は、聖霊を受け入れ、キリストと結合(共死共生)するという身体的体験である(ロマ6:3-4, 8; コロ2:12-13; エフェ2:5-6)。なお、受容された聖霊はその後の信仰生活を形づくる(ガラ5:16-26; ロマ8:9-16)。

さて、信徒によって受容された聖霊は、からだの復活の際にどのような働きをするのか。手がかりとなる重要な箇所を考察して行く(ロマ8:11; 1コリ15:42-52; 2コリ5:5; ロマ1:4; 1コリ5:5)。

### 2.1. ロマ8:11

この箇所ではパウロは神の霊がイエスの復活に関わり、信仰者のなかに宿っている神の霊が信仰者の復活にも関係することを明言している。「死ぬはずの体 *τὰ θνητὰ σώματα*」は、1コリ15:44-46の「自然の命の体 *σῶμα ψυχικόν*」と同じく、この地上での生物学的な体(有限の命)を示している。それに対して、復活の体は「霊的な体 *σῶμα πνευματικόν*」である。ロマ8:11では、「霊的な体」について言及されないが、「(キリストを死者から復活させた神が)信仰者に宿っている彼の霊(=神の霊)によって *διὰ τοῦ ἐνοικοῦντος αὐτοῦ πνεύματος ἐν ὑμῖν*」[(信仰者たちの)死ぬはずの体を生かすだろう *ζωοποιήσει καὶ τὰ θνητὰ σώματα ὑμῶν*]は、「自然の命の体」

が「霊的な体」に変容することを語っていると考えると良いであろう。このように、神の霊はイエスを復活させ、信仰者の復活の体をもたらす唯一の力(手段)であるとパウロが認識していることが分かる<sup>15</sup>。神の霊がどのように復活の体をもたらすのか、以下の1コリ15:42-52の内容を吟味することで解明していく。

## 2.2. 1コリ15:42-52

この箇所ではパウロは、「自然な命の体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\psi\upsilon\chi\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」が「霊的な体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\pi\upsilon\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」に変容すると論じる。パウロは  $\psi\upsilon\chi\eta$  を「魂」の他に、「命、意志、人格」の意味合いでも使用している。つまり、人間の次元、生物学的な活動や状態を表わす単語である。その形容詞  $\psi\upsilon\chi\iota\kappa\acute{o}\nu$  を使って「自然な命の体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\psi\upsilon\chi\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」と表現しているため、この表現は、地上に生きる有限性を持った人間(身体)を表していると言える。一方、復活の体は、生物学的な身体を超えた永遠の活動や状態にあり、神の次元に属するものである。それをパウロは霊( $\pi\upsilon\epsilon\upsilon\mu\alpha$ )の形容詞  $\pi\upsilon\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{o}\nu$  を使って、「霊的な体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\pi\upsilon\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」と表現している。自然な、命の体( $\sigma\omega\mu\alpha$ )から霊的な体( $\sigma\omega\mu\alpha$ )へ変容することをパウロは想定している(1コリ15:51-52)。彼の言説から分かることは、死者の復活を肉体( $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota$ )の蘇生としては捉えていない、ということである。事実、「肉と血( $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota$   $\kappa\alpha\iota$   $\alpha\iota\mu\alpha$ )」は神の国を受け継ぐことはできないと言明している(1コリ15:50)。では、ここで使われている体( $\sigma\omega\mu\alpha$ )が肉体( $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota$ )でないのであれば、いったい何を表しているのか。一つの可能性として、人間の身体を構成している種々の物質が入る「器」としてイメージしていたのではないだろうか。

一般に、当時の知識人たちは(例えば、中期プラトン主義者のプルタルコス ca.50-120年)、身体を上位部分と下位部分からなると考え、前者には霊魂が属し、それは死後も存続し続け最終的には神に同化できるが、後者には肉体( $\sigma\acute{\alpha}\rho\kappa\iota$ )が属しそれは死後消滅すると考えていた(伝統的な霊魂不滅の教説)<sup>16</sup>。そして魂( $\psi\upsilon\chi\eta$ )は生前の美德によって洗練され(乾いた軽い状態)、死後昇天することができる。他方、肉体は悪徳によって湿っており(重たい状態)、昇天することはできず死後消滅する。彼らは不死や死後の生の概念を完全に否定したわけではなく(エピクロス派などは除く)、人間のどこの部分が永遠を享受するかを論じていた<sup>17</sup>。

このような中期プラトン主義的な概念を踏まえて、1コリ15:42-52の内容を吟味すると、 $\sigma\omega\mu\alpha$  という器の中に、霊、魂、肉、血、水などが存在し「自然な命の体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\psi\upsilon\chi\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」を形成しているが、終末時に  $\sigma\omega\mu\alpha$  という器が維持されながらも、霊以外の物質はすべて外へ抜け落ち、霊だけが残りそれが充満し「霊的な体  $\sigma\omega\mu\alpha$   $\pi\upsilon\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」へと変容すると、パウロは考えていたのではないだろうか<sup>18</sup>。そし



て、霊だけに満たされた体 (σῶμα) は軽いため、天上へと昇天することができ (1テサ4:17)、そこで天体と同じ輝き (δόξα) を放つことができるのである (1コリ15:40-41, 43; ダニ12:1-3)。ただし、パウロが抱いたイメージは、ギリシアの伝統的な靈魂不滅の概念と同一ではなく、あくまでも体 (σῶμα) という枠を想定しており、この点はヘブライ思想に見られた肉体の復活の概念と親和性があると言えるだろう (イザ26:19; エゼ37:1-14; 2マカ7:9, 11, 14, 23他)。

中期プラトン主義的な概念をパウロが共有していたかどうかは断定できないが、少なくとも、パウロの言説からは、キリスト信仰者が洗礼を通して聖霊を受容しているため、「霊的な体」はその聖霊が充満した体である、とパウロが考えていた可能性を指摘できる。

ところで、洗礼を受ける前に身体に内在していた人間の霊 (πνεῦμα) はどうなるのだろうか。人間の霊と神 (キリスト) の霊 (πνεῦμα) はそれぞれ独立した実体であるが、受洗時にどちらかが一方を吸収するのだろうか。パウロの言説を見る限り、彼は両者の融和を想定していると思われる<sup>19</sup>。例えば、ロマ8:15-16で、パウロは「アッバ、父よ」と信仰者を叫ばせる神の霊の機能について言及し、「この霊こそが、わたしたちが神の子であることを、わたしたちの霊と一緒にあって証ししてくれる αὐτὸ τὸ πνεῦμα συμμαρτυρεῖ τῷ πνεύματι ἡμῶν ὅτι ἐσμὲν τέκνα θεοῦ」と説明する。そして、その霊は、神が「わたしたちの心の中に送り込んだ ἐξαπέστειλεν ὁ θεὸς . . . εἰς τὰς καρδίας ἡμῶν」(ガラ4:6) ものである。この認識は、Dunn の表現を借りると、人間の霊的な次元が「神の霊がその啓示的・贖罪的力を伝達する次元」<sup>20</sup> になり得ること、つまり、人間の霊と神の霊とが何らかの形で交流、対話、同意することを示唆する。事実、パウロは神の霊が人間の心の奥底に関わり、執り成しの祈りを発することを承知している (ロマ8:26-27)。このような協働作業は、神が人間に神の霊を送ったことによって開始された。それはまさに入信の出来事であった (「あなたたちは受けた (ἐλάβετε アオリスト・2人称複数)」(8:15))。そして、この経験は今なお有効であり、「わたしたちは神の子である (ἐσμὲν 現在形・1人称複数)」(8:16)。

このように、神の霊と人間の霊が融和し、それが救いの経験であり続けていることが分かる。そして、救いの経験は復活の体である「霊的な体」へと信仰者の身体が変容する際に、クライマックスを迎え、身体に内在する霊がその実力を発揮するのである。

1コリ6:17もまた、神の霊と人間の霊の融和を前提にしている。パウロは「主に結び付く者は主と一つの霊 (ἐν πνεύμα) となるのです」と、洗礼時の主との合一の経験を想起させている。その核となる出来事が「主と一つの霊」である。具体的な結合のプロセスは不明であるが、人間側の霊と主の霊が結合して、一つの霊となるとパウ

口は考えていたと思われる。つまり、別々の二つの霊が共存するのではなく、人間の霊が主の霊と融和し一つの霊になる<sup>21</sup>。また、洗礼において入信者は神の霊を受け、「アッバ」と叫びの応答をするが<sup>22</sup>、すでに上述したようにロマ8:15-16は、この叫びが神の霊と人間の霊の融和を示す重要な救いの出来事であり続けることを示している。このように、双方の霊が一つとなり、その融和を通して、キリストとの分断不可能な結合を信仰者は体験しているのである<sup>23</sup>。

以上、信仰者が復活の体に与る際、信仰者の身体に内在する、人間の霊と神の霊とが融和した霊が、不可欠な役割を果たすとパウロが考えていたことが分かる。

### 2.3. 2コリ5:5

パウロは、「地上の住みか ἡ ἐπίγειος οἰκία」と「天上にある永遠の住みか οἰκία αἰώνιος ἐν τοῖς οὐρανοῖς」もしくは「天からの住まい τὸ οἰκητήριον τὸ ἐξ οὐρανοῦ」という表現でもって、それぞれ地上を歩む人間の身体と終末時に与えられる復活の体を示唆しながら、終末に至るまでどのように信仰生活を全うしていくのか論じている(2コリ5:1-10)。

「住みか」という比喩表現は「からだ」を示し、「地上の住みか」、「天上にある永遠の住みか」あるいは「天からの住まい」は、それぞれ、1コリント書15章の「自然の命の体」と「霊的な体」に符合すると考えてよいだろう。そして、終末時に双方の体は断絶せず前者から後者へと変容するが、その事情を1コリ15:53-54(「朽ちるべきものが朽ちないものを着る」、「死ぬべきものが死なないものを着る」)と同様に、2コリ5:1-5でも衣服の着用のイメージを繰り返し使っている。すなわち、「(天からの住まいを) 上に着る ἐπενδύομαι」(ἐπενδύομαι 2回)、「(地上の住みかを) 脱ぎ捨てたいのではない (οὐ θέλομεν ἐκδύσασθαι)」(ἐκδύω 2回)。このイメージを通して「地上の住みか」と「天上にある永遠の住みか」あるいは「天からの住まい」との継続性を表現している<sup>24</sup>。また、「死ぬべきものが命によって飲み込まれてしまうために ἵνα καταποθῇ τὸ θνητὸν ὑπὸ τῆς ζωῆς」(2コリ5:4c) は、死に対する勝利を宣言した「死は勝利のなかに飲み込まれた κατεπόθη ὁ θάνατος εἰς νίκος」(1コリ15:54c) に符合する。

このような一連の終末時の事態を描写した最後に、まさにこの事態に備えて信仰者を整え (κατεργασάμενος ἡμᾶς εἰς αὐτὸ τοῦτο)、その手付金である霊 (ὁ ἀρραβὼν τοῦ πνεύματος) を与えたのが神である、とパウロは明言する (2コリ5:5)。

さらに、「霊という手付金 (ὁ ἀρραβὼν τοῦ πνεύματος)」、「うめく (στενάζω)」、「圧迫されている (βαροῦμαι)」は、ロマ8:21-23の「霊という初穂 (ἡ ἀπαρχὴ τοῦ πνεύματος)」、「うめく (στενάζω)」、「朽ちるものへの隷属状態 (ἡ δουλεία τῆς

φθορᾶς)」などに符合する。ロマ8:23では「私たちの体の贖い (ἡ ἀπολύτρωσις τοῦ σώματος ἡμῶν)」という表現で、朽ちて行く罪深い身体が復活の体へと贖われること(変容すること)を希求する様子が描写されている。2コリ5:5においても、身体の贖い(変容)を希望できる根拠は、すでに信仰者が受けている「霊という初穂」なのである。

地上で圧迫されうめくほどの苦難を経験しつつも、終末時の「天からの住まい」「体の贖い」を約束し保証してくれる「霊」が存在し、その「霊」はすでに信仰者に与えられている。それゆえ、その霊に基づいて信仰者は希望をもって歩むことができる、とパウロは力強く論じている。

## 2.4. ロマ1:4

ここでは、パウロはイエス・キリストが「神の子」と定められた理由を論じている。その際、キリストは、「肉によれば κατὰ σάρκα」、ダビデの種に由来する(ἐκ σπέρματος Δαβίδ)ダビデの子であり、「聖性の霊によれば κατὰ πνεῦμα ἁγιωσύνης」、死者たちの復活に由来する(ἐξ ἀναστάσεως νεκρῶν)神の子である、と肉と霊を対比させて論じている。この対比は、人であり神の子であるキリストを簡潔に説明している。この言説から、神の子の任命とその根拠となる復活は霊的な次元の出来事であるとパウロが考えていることが分かる。この節を含むロマ書の冒頭部分がすでに流布していた信仰告白の定式からの引用であったとしても<sup>25</sup>、手紙の重要な箇所を用いており、その内容にパウロが同意していることは明白である。

## 2.5. 1コリ5:5<sup>26</sup>

1コリ5:5の τὸ πνεῦμα は通常「彼の霊」と訳されているように(新共同訳、岩波訳、田川訳、協会訳など)、「人間の霊」として解釈されているが、テキストには「彼の」を示す指示代名詞はついていない。パウロが当該人物(近親相姦を犯した信者)の霊を示したかったのであれば、αὐτοῦをつけたらう。τὸ πνεῦμα は直訳すると「その霊」となるが、なぜパウロはこの表現を使ったのだろうか。上述したように、信仰者の「霊」は、洗礼時に受容した「聖霊」と融和している。そのため、τὸ πνεῦμα は双方の霊が融和した「その霊」を示していると考えられるのではないだろうか。この可能性は以下に見るように、パウロが救済論的な文脈でこの表現を使っていることから確認できる。

パウロは、近親相姦を犯した信徒を断罪し、その肉(σὰρξ)が減びるようにサタンに引き渡したと語り、他方、主の日(終末)に「その霊 τὸ πνεῦμα」が救われるために、と終末時の救いに言及している。この考えは、肉体が減んだ、つまり、死んだ信



仰者に「霊」が臨在するとパウロが考えていたことを示唆している。そして「その霊」が終末時に救われるとは、上述したように、復活の体である「霊的な体」を示唆していると考えられるだろう。パウロは、性的不品行が体現された肉(σάρξ)をサタンの領域へと追放することでその滅びを、そして信仰者が保持する「その霊(τὸ πνεῦμα)」の救い、すなわち、「霊的な体」への変容を祈願したと言えるのではないだろうか。近親相姦者は信者(聖霊を受容した者)であり、その身体に神の霊と人間の霊が融和した霊が内在している。そして、「その霊(τὸ πνεῦμα)」は終末の日の救いに不可欠なのである。

終末前にこの世を去った信者はどうなるのか、その救い(復活)についてテサロニケ教会で議論になったとき、信仰をもって死んだ人々は復活するとパウロは断言する(1テサ4:13-17)。そのカラクリについて詳しくは説明されていないが、ラッパの響きを合図に「(私たちは) 空中のなかへ(εἰς ἀέρα)、雲に包まれてかさられる(ἀρπαγησόμεθα 未来形・受動態・1人称複数)」(1テサ4:16-17)ということである。現代人には理解しがたい光景であるが、1コリント書に見られる、ラッパの響きとともに「(私たちは) 一瞬に、まばたきするうちに(ἐν ἀτόμῳ, ἐν ῥίπῃ ὀφθαλμοῦ)、変容される(ἀλλαγησόμεθα 未来形・受動態・1人称複数)」という描写に符合する(1コリ15:52)。また、地上から空中のなかへ雲に包まれる様子は、すでに考察した、天に昇る「霊的な体」のイメージとも親和的である。このことから、1テサ4:13-17では「霊的な体」は言及されていないが、それを想定した描写と考えることができる。

以上の考察から、信者が生前に受容した聖霊は、信者の霊と融和し、生前に不品行を犯したとしても、死後もその融和した霊は有効であることが前提とされている。そうでなければ、復活の体である「霊的な体」への変容は、すでに死んでしまった人には(たとえ信仰者であっても)生じないことになってしまう。まさに、その不安がテサロニケ教会で生じたのである。それゆえ、聖霊の働きは生者だけではなく、死者にも起こり得ることが想定されなければならない。死んで復活するまでの中間期間の状態について、「眠っている(κοιμάομαι)」(1テサ4:13-15; 1コリ15:18, 51)、あるいは「裸である(γυμνός)」(2コリ5:3)とパウロは表現するが詳しくは語らない。理由として、死後の世界はパウロとしても未知の事柄であったことは言うまでもないが、むしろ、この期間はとても短く、終末の日までパウロ自身が生存していると考えていた、つまり、切迫した終末観も持っていたからであろう(1テサ4:15; 1コリ15:51; ロマ13:11-12)。

次に、シュヴァイツァーが論じたように、キリストとの「からだの共同態」が未受洗者の家族(配偶者、子)を包摂するとパウロが考えていた箇所を考察する。この考察は、代理洗礼の対象者(死者)の範囲を吟味する上で示唆を与えてくれる。

### 3. 「からだの共同態」(1コリ7:14) について

この箇所パウロは離縁について論じているが、家族の未受洗者をどのように理解しているか興味深い言説がある。コリント教会において、未受洗者を配偶者としてもつ信者が、未受洗者(=異教徒)の汚れを避けるために離縁すべきかどうか思案していたようだ<sup>27</sup>。それに対して、パウロは、未受洗者の配偶者は信者である配偶者のゆえに「清められている(ἡγιασται)」(現在完了形)と論じ、さらには、その夫婦の子供は「清い(ἅγιά ἐστιν)」(現在形)と断言している。これをどのように理解するか研究者によって様々である。たとえば、「聖なる根」と「枝」の喩え(ロマ11:16)を手がかりに、結婚生活が続ける中で未受洗者の配偶者が信仰を持つ配偶者によって救いに導かれること(受洗)を比喩的に表現していると解釈する<sup>28</sup>。あるいは、「聖性の伝染」という概念は旧約聖書にも見られ(出29:37; 30:29; レビ6:18-20; エゼ44:19; 46:20)、パウロがこの概念を念頭にこの言葉を語った可能性もあるだろう。さらに、ここで使用されている動詞 ἁγιαζω(「聖別する、清める、聖なるものにする」)は、別の箇所でいずれも洗礼における聖化の実態を示している(1コリ1:2; 6:11)。それゆえ、1コリ7:14の「清められている」は、洗礼時の聖化を示していると解釈することが可能である<sup>29</sup>。

未受洗者の配偶者が信者の配偶者を通してどのように「清められている」となるのか、パウロは詳しくは語らない。しかし、その前提となる考えを彼の言説にそって描くことができる。すなわち、夫婦として「二人は一体 οἱ δύο εἰς σάρκα μίαν」(1コリ6:16)であり、双方のからだ(σῶμα)はお互いが権限をもって支配し合う(ἐξουσιάζω)ほど結束している(1コリ7:4)。この実態は、「自然的肉体的共同態」とも表現できるだろう<sup>30</sup>。また、洗礼を通して、受洗者はキリストと「一つの霊 ἐν πνεύματι ἐστιν」となる(1コリ6:17)。そのため、信者のからだ(σῶμα)は、キリストのからだ(σῶμα)の一部であり(1コリ6:15)、聖霊が宿る宮(ναός)でもある(1コリ6:19)。ここに、信者とキリストとの「からだの共同態」が形成される。また、この「共同態」は、娼婦や悪霊と結合して生じる別の「共同態」によって破壊され得るものであり、それゆえパウロはその事態を可能な限り回避させようとしている(1コリ6:15; 10:21-22)。ただし、夫婦間に形成された「共同態」とキリストの「共同態」との関係については、パウロは一切触れていない。おそらく、夫婦の「共同態」とキリストの「共同態」とは、相反せず融和すると考えていたと思われる。この理解は、すでに考察した「人の霊」と「神の霊」が融和する理解に通じるものと言える。それゆえ、一方が信者で他方が未受洗者の夫婦の場合、この融和された「共同態」を通して、未受洗者の配偶者は「清められている」となり、二人の間の子どもも、融和した「共同態」のなかに生

まれてきたことで、当然「清い」と見なされるのである(1コリ7:14)。無論、「清められている」が洗礼の聖化を比喩的に表現しているのか、あるいは、字義通りなのか、その判断は分かれる。しかし、現在完了形が使われていること、未受洗であることの汚れのゆえに離縁までを思案している深刻な状況、そして、上記で考察した字義通りの「からだの共同態」を考慮すると、パウロが単なる比喩表現を行っているとは考えにくい。それゆえ、信者の配偶者が享受しているキリストとの「からだの共同態」が、夫婦の「からだの共同態」のゆえに、何らかの形で未受洗者の配偶者と子どもを包摂している、とパウロが考えていたと言えるだろう。家族内であれば別々の個体であっても、生物学的だけでなく霊的な次元でも他の個体に影響を及ぼすほど結びつき合っていると考えられていたのである。

#### 4. 代理洗礼の対象者(死者)について

代理洗礼の対象者の範囲についてパウロは何も語っておらず、手がかりは1コリ15:29「死者のために ὑπὲρ τῶν νεκρῶν」のみである。まず、この問題に関してそもそも代理洗礼を否定する立場がある。それによると、「死者(οἱ νεκροί)」は、キリスト信仰者(受洗者)であって、その死者のために洗礼を受ける者は(οἱ βαπτιζόμενοι)、未受洗者であり、その死者と血縁関係にあった者、もしくは、親しい友人であったとする。そして、キリスト信仰者であった故人が生前にこの未受洗者が入信するために心砕き祈りを献げていたため、その思いにほだされてこの未受洗者は洗礼を受けた。同時に、その洗礼は終末時に復活して故人と再会を願って行われたのである、と<sup>31</sup>。それゆえ、この理解では、この洗礼は代理洗礼ではなく、未受洗者が洗礼を受けるという通常の洗礼儀式と何ら変わらないことになる。この解釈は現代人に理解しやすく興味深い、生前の故人との思い出は全くの想像であり、復活再会の願いは一般的に想定されるもので、この種の洗礼儀式に特化されたものではない。さらに、この解釈では、洗礼志願者が抱く、通常明らかにされない内面的な思い(友情や親愛の情、あるいは政略的な思惑も含め)に踏み込んで、それを根拠に論じている。確かに、そのような思惑を内面に抱いて洗礼に臨む者は存在しただろう。しかし、この解釈に立てば、「死者」である亡くなったキリスト信仰者のために、また、故人との生前の思い出のために、かつ、終末時に再会したいという願望のために、洗礼を受けるということが周知されていたということになる。そうでなければ、通常の洗礼儀式には不要である「死者のために」という説明をわざわざつける必要はなかったからである。このような動機付けの洗礼が果たして認められたのだろうか。パウロにとって、洗礼は、キリストへの信仰が大前提であり、すでに考察したように聖霊の受容およびキリスト

との「からだの共同態」が形成される決定的な出来事である。このパウロの洗礼理解において、親しくしていた故人のため、もしくはその生前の思い出や再会願望というもっぱら人間的な思惑を公言して（内密にしていればともかく）執行される洗礼は受け入れられないと思われる。「死者」をキリスト信仰者として想定し、結局のところ代理洗礼を否定する別の解釈もあるが（例えば、コリントで宣教を行い、その後亡くなった使徒の名誉のため）<sup>32</sup>、いずれにせよ、上述したパウロの洗礼理解から判断すると、既に洗礼を受けた者のために別の人物が洗礼を受けるといふ動機付けは意味をなさないだろう<sup>33</sup>。それゆえ、パウロがこの種の洗礼を認めたのかどうか大きな疑問が残る。また、この種の解釈を採用する立場には、概して代理洗礼を「異教的」「魔術的」として強く否定する傾向があり<sup>34</sup>、該当テキストの解釈そのものに恣意的な判断が散見される<sup>35</sup>。

以上のことから、「死者」をキリスト信仰者とする解釈は説得的ではなく、本小論では代理洗礼を前提として、すなわち、「死者」を未受洗者と想定する。では、未受洗者とはいったいだれを指すのか。不特定多数の未受洗者を想定することは、パウロの宣教内容からしても困難である。なぜなら、この種の代理洗礼が許されるならば、わざわざ出かけて行って宣教する必要はなく、亡くなった見ず知らずの人々のためにキリスト信仰者が日々代理洗礼を執行すれば良いことになるからだ。また、不特定多数となると、各人がキリスト信仰もしくは教会とどのような関係にあったかも全く不明であり、そのような状況での代理洗礼は、各自のキリスト信仰を前提とするパウロの洗礼理解にも合わない。それゆえ、キリスト信仰者や教会と何らかの関係があった特定の未受洗者を想定するのが自然であろう。また、この想定は、「死者のために ὑπὲρ τῶν νεκρῶν」の「死者」に定冠詞が付けられていることと符合する。この場合、教会に出入りしている未受洗者（1コリ14:16, 23, 24）、あるいは、家族内の未受洗者（1コリ7:12-14）が想定される。前者について「信者でない人（ἄπιστος）」に加えて「素人、凡人（ιδιώτης）」という用語も併用されているため、14章の文脈から判断して、まだ礼拝活動に馴染みがなく、異言を理解できない初心者を目指していると思われる<sup>36</sup>。そして、このような人たちの中には、洗礼を受けずに亡くなった者がいた可能性がある（1コリ11:30）。他方、本小論の「問題提起」ですでに論じたように、シュヴァイツァーによると対象者は家族内の未受洗者となる。ただし、以下に推察するように、教会に出入りしていた未受洗者を想定することも可能である。

「死者のために洗礼を受ける人たち（οἱ βαπτιζόμενοι ὑπὲρ τῶν νεκρῶν）」という表現が簡潔すぎるため、過去に種々の説明や解釈がなされてきたが（H. Conzelmannによるとその数は200にまでのぼる）<sup>37</sup>、コリントの信徒とパウロとの間では自明であり、この簡潔な表現のみで双方が了解できる事柄であった。また、復活信仰を否定す

る人たちを論駁するためにパウロが引き合いに出せる事実（証拠）であった。つまり、代理洗礼の内容や実践はコリント教会で十分に理解され受け入れられていたのである。対象者を家族内の未受洗者に限定すると、事例はかなり少なくなってしまうだろう。さらに、当時の家父長的な家族関係において、家長の信仰にその他の家族のメンバーが従うという一般的な実情を考慮すると（例えば、クリスポ一家 [使18:8] やステファナ一家 [1コリ1:16] など）、家族内の未受洗者の数もまた少なく見積もらなければならない。なお、J. Murphy-O'Connorによるとコリント教会の基礎人数は40-50名ほどである<sup>38</sup>。コリント教会において代理洗礼が十分に認知されるために、どれほどの事例が必要であったかは断定できないが、ある程度の数が必要であったとするならば、教会に出入りしていた未受洗者も対象者であったと想定することも可能である。なお、「死者」が洗礼志願者であったと想定することもあるが<sup>39</sup>、そのような特定を行うことは困難である。

## 5. まとめ

以上の考察から、キリスト信仰者に宿っている聖霊の働きがなければ、復活の体と与ることができないとパウロが考えていたことが明らかとなった。復活時に生前授与された聖霊の役割が必要不可欠であるならば、未受洗者、すなわち、生前に聖霊受容を体験できなかった死者は、復活の体と与ることができないことになる。それを危惧するキリスト信仰者が代理洗礼を行なうことで、授与された聖霊が未信者の死者に賦与されると信じていた可能性がある。パウロ以降の時代（1世紀末から2世紀半ば）になるが、昇天前のキリストの霊が死者（未受洗者）に宣教したと信じられ（1ペト3:18-19; 4:6）<sup>40</sup>、また、死後の世界で使徒たちが未受洗の義人に洗礼を施すといった内容が語られた（「ヘルマスの牧者」第九のたとえなし16.2-7）<sup>41</sup>。さらに、キリスト自身が死者に洗礼を授けることがそれぞれの仕方で語られた（「使徒たちの手紙」27<sup>42</sup>、「ペトロの黙示録」13-14）。このような当時の「死者の世界」の理解を踏まえると、代理洗礼時において授与された聖霊（キリストの霊<sup>43</sup>）が死者に影響を与えると信じることは、それほど奇異なことではなかったと言えるだろう。

代理洗礼の対象者（死者）について、シュヴァイツァーが主張するように、キリストとの「からだの共同態」が夫婦間の「共同態」（子を含む）に投影されることが代理洗礼の前提とするならば、その対象者は家族関係にあった故人（夫、妻、子、可能性としてその他の血縁者）に限られることになる。そして、洗礼を受ける者はその遺族となる。ただし、代理洗礼がコリント教会で十分に認知されていたことを踏まえると、教会に出入りしていた未受洗者もその対象者に入っていたと想定する余地があ



る。その場合、洗礼を受ける者は故人の教会関係者となろう。

## 6. 今後の課題

本論文では、洗礼と復活における聖霊の役割について考察し、それを踏まえて、代理洗礼の内実の一部を明らかにした。今後の課題としては、どのような理屈に基づいて生者から死者への働きかけが有効であると信じたのか（生者側の代理洗礼が死者に作用すると考えた根拠）をさらに考察する必要がある。これに関して、シュヴァイツァーの「からだの共同態」の概念に加え、古代ギリシア・ローマ世界における死後の世界観も有益な示唆を与えてくれる。そこでは、生者と死者の境界はしばしば透過的であり、「死後の魂」の具体的なゆくえに人々の高い関心があった<sup>44</sup>。これらの点を手がかりに、さらに代理洗礼のカラクリを解明していきたい。

### 注

- 1 B. M. Foschini, "THOSE WHO ARE BAPTIZED FOR THE DEAD," 1 Cor. 15:29" (Third Article), in *CBQ* 13 (1951): 46-78.
- 2 R. E. DeMaris, "Corinthian Religion and Baptism for the Dead (1 Corinthians 15:29): Insights from Archaeology and Anthropology," in *JBL* 114 (1995): 661-682.
- 3 J. A. Trumbower, *Rescue for the Dead: The Posthumous Salvation of Non-Christians in Early Christianity* (Oxford: Oxford University Press, 2001).
- 4 M. F. Hull, *Baptism on Account of the Dead (1 Cor 15:29): An Act of Faith in the Resurrection* (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2005).
- 5 D. B. Sharp, "Vicarious Baptism for the Dead: 1 Corinthians 15:29," in *Studies in the Bible and Antiquity* 6 (2014): 36-66.
- 6 G. D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (Michigan: Wm B. Eerdmans, 1987) 764-65.
- 7 Chrysostom によると、マルキオン派は死者のための代理洗礼を次のように執り行っていた。洗礼志願者が洗礼を受ける前に亡くなった場合、亡くなった洗礼志願者を長椅子に安置し、その下にすでに洗礼を受けた生存者が横たわる。そして、亡くなった洗礼志願者の代わりに、生存者が洗礼時の質問に応答し、水でもってバプテスマを受ける。この儀礼を通して、亡くなった洗礼志願者は洗礼の恵みを得ることができると考えた。ここでは、代理洗礼の対象者は、生前に洗礼を希望した洗礼志願者に限定されている。テキストは以下を参照。*The Homilies of Saint John Chrysostom, Archbishop of Constantinople, on the Epistles of Paul to the Corinthians*, the Oxford Translation, revised with additional notes by T. W. Chambers (The Christian Literature Company, 1889) 244. Cf. Foschini, 51; DeMaris, 662.
- 8 Sharp, 57; H.-J. クラウク（小河陽監訳、吉田忍、山野貴彦訳）『初期キリスト教の宗教的背景 上巻』（日本キリスト教団出版局、2017年）175-76頁; A. シュヴァイツァー（武藤一雄、岸田晩節訳）『シュヴァイツァー著作集 第十一巻 使徒パウロの神秘主義（下）』（白水社、1958年）156-57頁。
- 9 例えば、B. Witherington も同様の指摘をしている（*Conflict and Community in Corinth: A Socio-*

- Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* [Michigan: Wm B. Eerdmans Publishing Company, 1995] 305)。
- 10 テキストは以下を参照。Tertullian, *Concerning the Resurrection of the Flesh*, Translation of Christian Literature, series 2, Latin texts, by A. Souter (New York: The Macmillan Company, 1922) 118–122、Tertullian, *Adversus Marcionem*, ed. and trans. by E. Evans, Books 4 and 5 (Oxford: The Clarendon Press, 1972) 569–577。
- 11 シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義 (下)』155–60頁。
- 12 シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義 (下)』159頁。
- 13 シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義 (下)』160頁。
- 14 霊の洗礼は入信儀礼の主要素であり、信者に対してのちにキリスト者であることを想起させる役割もっていた。それほど劇的、決定的な体験であった (James D. G. Dunn, *Baptism in the Holy Spirit: A Re-examination of the New Testament Teaching on the Gift of the Spirit in relation to Pentecostalism today* [London: SCM Press, 1970] 1–7)。
- 15 J. A. Fitzmyer, *Romans* (New York: Doubleday, 1993) 491、ペーター・ランペ「霊的な体についてのパウロの概念」T. ピーターズ他編 (小河陽訳)『死者の復活 神学的・科学的論考集』(日本キリスト教団出版局、2016年) 156–157頁。
- 16 D. B. Martin, *The Corinthian Body* (New Haven: Yale University Press, 1995) 108–117。
- 17 無論、古代ギリシア哲学における靈魂不滅の理解には変遷があり、それを受け入れない立場もある (E. Rohde, *Psyche: The Cult of Souls and Belief in Immortality Among Ancient Greeks* [London: K. Paul, Trench, Trubner & Co., LTD., 1925] 362–389)。また、ヘレニズム哲学においても死後の生について見解は多様である。例えば、ストア派哲学において、魂の不死は想定されなかったが (A. A. ロング [金山弥平訳]『ヘレニズム哲学 ストア派、エピクロス派、懐疑派』[京都大学学術出版会、2003年] 394頁)、死後一定期間存続し、賢者のそれは上方へ(天へ)昇ると論じられることがあった (H.-J. クラウク [小川陽監訳、河野克也、前川裕訳]『初期キリスト教の宗教的背景 下巻』[日本キリスト教団出版局、2019年] 157–165頁)。
- 18 この意味で、体 (σῶμα) は空気を充満させる風船のようなものとして捉えていたかもしれない。Cf. Martin, *The Corinthian Body*, 123–129。
- 19 以下の議論(人の霊と神の霊の融和)については、既出の拙論(村山盛華「第一コリント5章5節についての一考察 — 終末論的霊肉二元論の観点から —」『基督教研究』[2009年] 94–95頁)を改訂したものである。
- 20 James D. G. Dunn, *Romans 1–8* (Dallas, Texas: Word Books, 1988) 454。
- 21 Dunn, *Baptism in the Holy Spirit*, 124。
- 22 無論、この叫びは洗礼時に限定されたものではなく礼拝中に神の子性を表現する際も発せられただろう (E. Käsemann, *Perspectives on Paul* [Philadelphia: Fortress Press, 1971] 130)。
- 23 G. D. Fee, *God's Empowering Presence* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994) 24–26。
- 24 着用のイメージは、衣服と着る本人との一体感を表現するが、信仰者の入信とその後の信仰生活のあり方を示すときにも、「キリストを着る」という表現で使われている。信仰者とキリストとの密着である (Χριστὸν ἐνεδύσαθε ガラ3:27. ἐνδύσαθε τὸν κύριον Ἰησοῦν Χριστόν ロマ13:14)。
- 25 C. E. B. Cranfield, *Romans 1–8* (London: T&T Clark, 1974) 57。
- 26 詳細な議論は、拙論(村山盛華「第一コリント5章5節についての一考察 — 終末論的霊肉二元論の観点から —」『基督教研究』[2009年] 83–100頁)を参照。

- 27 異教徒との結婚は汚れたものであり、当然、ユダヤ教では厳禁であった（エズラ9章、ヨベル30章他）。
- 28 Fee, *The First Epistle to the Corinthians*, 300-1。
- 29 A. Robertson, & A. Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle of St Paul to the Corinthians*. (Edinburgh, Scotland: T&T Clark, 1911) 141-42。
- 30 シュヴァイツァー『使徒パウロの神秘主義（下）』159頁。
- 31 Robertson and Plummer, *The First Epistle to the Corinthians*, 359-60, R. Schnackenburg, *Baptism in the Thought of St. Paul: A Study in Pauline Theology* (Oxford: Basil Blackwell, 1964) 102。
- 32 J. Patrick, "Living Rewards for Dead Apostles: 'Baptised for the Dead' in 1 Corinthians 15.29," in *NTS* 52 (2006): 71-85。
- 33 未受洗者が亡くなった未受洗者のために洗礼を受けるシナリオについても想定できるが、パウロの洗礼理解から判断すると、聖霊受容とキリストとの結合を洗礼志願者がまず経験することが求められたのではないだろうか。つまり、洗礼に一石二鳥的な役割を求めることは想像しにくい。それゆえ、亡くなった未受洗者のために洗礼を受ける者は、既に洗礼を受けたキリスト者であることが求められたと思われる。かつ、そのキリスト者は下記に見るように、亡くなった未受洗者と特定の間柄にあった人物であったと思われる。
- 34 おそらく、パウロがそれを認めることに拒絶反応を持つからであろう。また、モルモン教が死者のための代理洗礼を行なっていることも少なからず影響があると思われる（参照、沼野治郎『モルモン教をどう見るか——第三の視点をさぐる——』[せせらぎ出版、2013年]）。
- 35 たとえば、Robertson and Plummer, *The First Epistle to the Corinthians*, 359, Schnackenburg, *Baptism in the Thought of St. Paul*, 95-102, A. C. Thiselton, *The First Epistle to the Corinthians: A Commentary on the Greek Text* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2000) 1248-49。
- 36 Robertson and Plummer, *The First Epistle of St Paul to the Corinthians*, 313。
- 37 H. Conzelmann, *1 Corinthians* (Philadelphia: Fortress Press, 1975) 276。
- 38 J. Murphy-O'Connor, *St. Paul's Corinth: Texts and Archaeology*, third rev. and expand. ed. (Minnesota: The Liturgical Press, 2002) 182。
- 39 ἰδιώτηςは「素人、凡人」の意味他に、「改宗者」「洗礼志願者」「求道者」の意味もあり得る（W. Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 2<sup>nd</sup> ed. [Chicago: The University of Chicago Press, 1979] 370）。
- 40 キリストの陰府下りとそこでの宣教は、使2:24-31や「ペトロ福音書」41-42などにも見られる。
- 41 「ヘルマスの牧者」は、エイレナイオス、アレキサンドリアのクレメンス、オリゲネス、テルトゥリアヌスなどによっては、権威ある文書として認知されていた。また、シナイ写本では、この書は正典の中に入っている。
- 42 テキストは以下を参照。『聖書外典偽典 別巻』補遺Ⅱ（教文館、第3版1995年）68頁、F. Watson, *An Apostolic Gospel: The 'Epistula apostolorum' in Literary Context* (Cambridge: Cambridge University Press, 2020) 60-61。
- 43 パウロは主（キリスト）と霊を同定している（2コリ3:17 ὁ δὲ κύριος τὸ πνεῦμα ἐστίν）。
- 44 例えば Rohde, *Psyche*, 1925、Trumbower, *Rescue for the Dead* における詳細な考察を参照。